

令和4（2022）年度第1回名桜大学FD研修会報告

（テーマ）高大接続：『学習する組織』による「主体的・対話的・共同的な大学・教室」のつくりかた

（文責）FD委員 佐久本 功達

令和4年度の第1回名桜大学FD研修会は、8月25日(木)に本学学生会館 SAKURAUM 6階スカイホール A において開催した。今回は、探究・STEAM 教育の研究者・実践者として活躍している、森弘達氏（学校法人大妻学院中学高等学校進路指導部長・探求科主任）を講師に、講師補助として中村智治氏（株式会社バースディ代表取締役社長）を招き、テーマを「高大接続：『学習する組織』による「主体的・対話的・協働的な大学・教室のつくりかた」として実施した。本研修会は、本学FD委員会の主催、特定研究「やんばるとSDGs－名桜大学の高大接続とピア・ラーニングプログラム－」およびリベラルアーツ機構の共催で行った。

現在、中学校および高等学校においては、変化の激しい社会に対応するために、探究的な見方や考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標とした総合的な学習、いわゆる「探究学習」が推進されている。本学では、第3期中期計画に「高大接続の推進」を掲げ、本年度は「初年次教育の内容を検証し、地域からのニーズを踏まえた改善策を立てる」ことを行動計画としている。そこで、本FD研修会では、前述したように、特定研究「やんばるとSDGs－名桜大学の高大接続とピア・ラーニングプログラム－」およびリベラルアーツ機構の共催で実施することにより、大学入学後の初年次教育「教養演習」の授業改善・授業力向上に資することを目的とした。参加者は、92人（対面61人、オンライン3人、オンデマンド（後日期間限定で実施）28人）であった。

本研修会の内容については、「社会の大きな変化と学校教育」、「大学入試の新傾向」、「学習する組織」、「探究」、「非認知能力の育成」が話題として取り上げられた。「社会の大きな変化と学校教育」では、AI、IoT、ブロックチェーン、メタバース、Web3.0などの革新的なデジタル技術の進展によるSociety5.0の到来についての説明があった。この社会の加速度的な大変化に伴い、これまでの日本の教育モデルはすでに時代遅れであること、2022年度から高等学校で新学習指導要領が実施され「探究」に重点が置かれていることの説明があった。「大学入試の新傾向」では、総合型選抜や学校推薦型選抜を中心に論述型の「正解のない入試問題」が出題されており、慶應義塾大学環境情報学部の一般選抜や京都大学総合人間学部の特色入試が紹介された。「学習する組織」では、社会および時代的变化の激しい現代において、全体を把握し中長期的に考えるというシステム思考により課題が抱える構造を捉え、未来を洞察・創造することが求められていること、このため、子どもから大人まで「学習する組織」の理論に基づくシステム思考を学ぶべきであるとの説明があった。「学習する組織」(Learning Organization)とは、ピーター・M・センゲ（マサチューセッツ工科大学教授）、クリス・アーギリス（ハーバード大学教授）らによる概念で、「目的に向けて効果的に行動するために、集団としての意識と能力を継続的に高め、伸ばし続ける組織」との説明があり、「学習する組織」の「5つのディシプリン（規律）」として、「自己マスタリー」「共有ビジョン」「システム思考」「メンタル・モデル」「チーム学習」についての解説があった。「システム思考」では、そのツールとしての「ループ図」や「氷山モデル」等の紹介があった。「チーム学習」では「認知の4点セット」として、「価値観」「感情」「経験」「意見」を学習者間同士で分かりやすく客観的に捉えることのできるフレームワークの紹介があった。「チーム学習」の説明の最後に、学校改善について、京都市立葵

小学校と札幌新陽高等学校における取り組みの事例紹介があった。「探究」では、昭和薬科大付属高等学校の「地域研究（沖縄問題）」や大妻高等学校の「STEAM 探究講座」の紹介があった。「非認知能力の育成」では、非認知能力の育成とその測定（可視化）についての話題が取り上げられた。少子高齢化と人口減少の中で多くの課題を抱える日本においては、イノベーション人材の育成が必要であり、この教育には認知能力のみならず、非認知能力を育むことが大切であるとの説明があった。非認知能力の育成と可視化に係る学校の教育活動として、大妻中学高等学校におけるテキスト『FUTURE』の活用事例が報告された。また、非認知能力の可視化については、同校が活用している「Discover Method」の紹介があり、生徒一人一台所有しているタブレット端末から CBT（Computer Based Testing）により受検を実施しているとのことであった。

質疑応答では、本学教員から「大変素晴らしい取り組みを知ることができた。やんばるの子どもたちの教育に浸透させるにはどのような方法が考えられるか」との質問があった。講師の森弘達先生からは「後ろ向きに捉えることはない。読んだり書いたりすることは繰り返しが必要。高偏差値である子どもが必ずしもよい文章が書けるということはない。学力レベルに関わらず、（教材は）良いものを選んできて組み立てること。大人、子どもの区別なくお互いに越境して楽しく学び合うことがよいのでは。沖縄の子どもたちはポテンシャルが高いかもしれない」と激励のメッセージを含む回答を頂くことができた。

本研修会では「探究学習」について最先端の内容が紹介された。受講後、「人に教えられたものは身につかない。自ら探して得られたものだけが自分の力になる」という故中川一政画伯の言葉を思い起こした。これは「探究学習」の効果が自然と腑に落ちるものではないか。本学は「探究学習」を受けてきた新生を3年後に受け入れることになるため、「初年次教育」の変革の時期に直面していることをさらに実感した。この世界の未来を担う強い主体性を持った存在としての「国際的教養人」の育成のため、本学は勇気をもって変化することが求められている。

付記

本 FD 研修会是一部ワークショップを取り入れる予定があったため、基本的には対面で参加するように参加者に呼びかけた。ただし、希望者には、オンラインでも参加できるようにし、研修会全体をハイブリッド形式で実施した。また、開催当日に参加できなかった対象者も研修できるように録画収録し、後日、録画視聴（オンデマンド）研修として、収録したコンテンツを期間限定（9月5日～9月30日）で配信した。オンラインとオンデマンド参加者に対しては、資料をデータにより提供した。出欠確認については、どの参加形態においても、研修後のアンケートへの回答をもって本 FD 研修会へ参加したこととした。



写真1 森弘達先生の講義を熱心に聴く教員たち



写真2 システム思考のツールの1つ「ループ図」の説明